

## 環境破壊と生命の原理

特集

1

宮腰繁樹

### I———自然界のなかにおける公害の位置づけ

#### 1・生存と生産

ここ半年ぐらいの間に、公害問題が非常にクローズアップされてきているが、大気汚染、水質汚濁あるいは土壌汚染にみられる環境破壊は、主として都市の区域内でおこなわれている人間生活からの廃棄物、あるいは都市活動、産業活動から生ずる廃棄残渣等に対する処置が適正でないことから引き起こされている。そして、大気汚染対策、水質汚濁対策を厳重に行なうほど汚染物は固形物として分離され、この固形物をさらにどう処分するかの問題が残されるので、環境汚染防止は、結局は固形廃棄物の適正処置<処理、処分、再利用>に帰着する。これらの点に関しては、本市の都市廃棄物研究会についての報告等にくわしくのべられているので、ここでは、廃棄物の不適正処分が主要な原因である公害というものを、人間生活の場においてどうとらえるべきかを考えてみたい。

都市への高度の集中が進み、過密によるいろいろな都市問題が続発しているなかで、公害をどう位置づけていくかは、人により千差万別であり、このことがまた一層の問題の紛糾、論議の不毛をまねいているかにも感じられる。

そこで、人が、「生きている」こと、「生きていく」ことというもっとも素朴な次元まで立ちもどって、それらと公害とのかかわりあいはどうなのか、公害という事象が人間社会やそれをとりまく自然界のなかでどのような位置を占めるのかについて論を進めたい。

ことはむしろ単純にして明快であるといえる。図1は、説明を明確にするために、その関連を流れとして示したものである。

生命は、「人が生きる」<人生>ことの根元である。その生命の存在<生存>、つまり「人が生き



と称しえないといえよう。

以上を要約すると、人生とは、人の生命を根元として、その存在<生存>と活動<生活>の実体であって、物、技術、システム、価値の生産を媒体として、安全、健康、利便、生きがいという快適性を追求している場であるといえる。これを「生命の原理」といおう。

## 2・矛盾をひきおこす経済の論理

この場において、生存・生活と生産との間に、あるいは、安全、健康、利便、生きがいの各要素の間に矛盾・あつれきがなく、まさに快適に展開するものであるならば、まさしくこれこそ地上の楽園というべきであろう。

しかしながら現実には、その調和がいちじるしく崩れ、各要素間の矛盾が激化し、そのひずみとして一連の都市問題<と同時に、裏腹の問題としての過疎問題>をひきおこしている。すなわち、生存<安全>と生産<利便>との間の矛盾が災害をまねき、生活<健康、あるいは生きがい>と生産<利便>とのあつれきが公害や体制問題をおこしている。

その原因は、媒体であるべき生産が、実体である生存および生活から遊離して自己目的的に独走先行をはじめたことにある。たしかに生産性の向上は、物資、労働、技術の集積の利益の上になりたち、それが技術社会化、都市社会化を促進させてきたのであるが、売れるものをつくる、もうかるものをつくるといった、生産システムの必然として、生産の目標が利便のみならず利益の追求、利潤の増大へと転化するにおよんで、経済の論理、資本の論理が、生命の原理から逸脱して独走をはじめ、ここに生産は単なる物産に墮落してしまったのである。これにともなって都市は急速にして過度の集中をまねき、過密の弊害が顕在化し、災害や、公害の問題のみならず、必要な都市施設の

不足、欠如という都市の利便そのものまでも阻害するような事態にいたった。そして一方では都市に住む人びとを大量消費経済の渦の中に巻きこむとともに、他方では飽くなき開発によって農民を大地から追いたて、漁民からは海を奪い、さらにこれらの人びとを過密都市に狩りたてるといった悪循環をくりかえしてきたのである。

したがって、この事態から回復するためには、一言でいえば「経済の論理」から「生命の原理」にたちかえらなければならない。生産を本来の意味での媒体として再確認し、安全と健康と利便と生きがいの調和のとれた進展を望みうるシステムを追求しなければならない。

ここにおいて、安全と利益、健康と利益の間のひずみとしての災害と公害の問題が、生きがいの欠落としてとらえられる体制問題とともに、人の生きる場においてもっとも基本的な問題であることがあきらかである。そして災害と公害、つまり防災と環境保全とは物的な環境づくり、都市づくりの基本条件として考えなければならないこともおのずとあきらかであろう。

## 3・おびやかされる自然と人間

以上が生命の原理による、災害、公害問題の位置づけであるが、そのよってたつゆえんについて蛇足をくわえるならば、つぎのとおりである。

①生命を失ってからではすべておそすぎる。

②生命をそこなうのは災害ばかりでなく、公害も物心両面の健康をむしばみ、ついには生命を失うにいたる。災害は急性毒的に作用し、公害は慢性的な蓄積毒として作用する点がことなるだけで、生命の阻害という本質においては同じである。

③人命のみならず、生物界、自然界についても、その生命、物質代謝作用を失ってからではおそすぎる。

自然は有限であって、人間活動のもたらす変化、

影響を無制限に受け入れはしない。＜無限と思える空気を例にとっても、地球上で人間1人がもつ空気量は約17億 $m^3$ と推定されるが、人口、気象条件によっては、たとえば逆転層が300mのロスアンゼルス市では、1日1人当たり5万～8万 $m^3$ になる。快適な生活をおくるには1人1日4万 $m^3$ が必要とされている。東京では逆転層が60～70mのところのできることもあるので、2万～3万 $m^3$ となると推測されている。また、有限空間の本質は、まさにアポロ13号の水、酸素等の窮乏等の緊急事態に典型的に示された。＞

このような限界を越えてまでの生産活動、都市活動は当然制御されなければならない。

したがって「公害は工業立国の必要悪。ある程度はやむをえない。」「最近の日本は公害アレルギーでかなわん。」「公害ばかり強調して生産力が落ちたら元も子もない。」といった経済優先の考え方、あるいは「公害防止には莫大な費用がかかる。コスト負担はだれがするのか。」といった経済の論理を逆手にとったなかば強迫的ないい方は、生命の原理からすればまったく次元のちがう発言であって根本的に容認しえないところである。かりに経済の論理、プライスメカニズムによって考えても、いまや劣悪な環境のなかで外部不経済を無視しては企業そのものが成立しがたく、公害対策は企業にとって避けることのできない共通の競争条件になってきているので、公害防止技術開発等によるコストダウンをはからなければ企業自身が生きのこれなくなったといえよう。むしろここで注意すべきことは、公害対策そのものが、企業目的に転化し、公害防止の本質からはずれた疑似公害対策事業が経済の論理に乗って独走をはじめることであろう。この間の事情は公害を災害と読みかえてもまったく同様である。

### 1・都市の災害

災害、公害の種類、様態、範囲をどう考えるかも大きな問題であるが、その細部にふれることは本文の目的ではないので、とくに説明を要することについてのべてみたい。

都市における災害は、大都市であるほど構造的に巨大化し、複雑化しているところに、いろいろな物資、エネルギーが大量に蓄積され、さらに人間が多数集中しているのので、一たん災害が発生すると、その結果はきわめて悲惨な状況を呈することになる。そのきっかけもいわゆる自然災害のみならず、産業災害や交通災害のように、簡単な事故が大きな災害を誘発する確率が非常に高まっている。さらに先年のニューヨーク市の停電のように都市機能を瞬時にして停止するような文明災害ともいうような事態がますます多くなろう。断水も同様な現象であるが、先頃の「よど号ハイジャック」事件における電源停止による換気不能、トイレの満杯による使用不能は、「アポロ13号」とともに現代都市文明の危険性を象徴的に示すものであろう。また近代機械文明のあり方の問題提起ともいうべき欠陥車や欠陥船等も、ひろく現代災害の範疇に属するものといえよう。

### 2・公害と自然

公害のなかでは、大気汚染、水質汚濁、騒音振動あるいは有害食品＜薬害＞についてはひろく論議されているし、また都市廃棄物の問題が、いまや決定的な環境破壊をおこさんとしている点については本市都市廃棄物研究会の経過のなかでもあきらかにされてきている。都市公害としての地盤沈下といえ、いままでは工業用水としての地下水汲みあげがおもな原因であったが、最近では同じ地下水脈の上流で団地開発が行なわれ上水水源と

して地下水を使用したところ、おそらくこれが原因で、下流では汲揚規制により沈下がおさまっていたにもかかわらず、ふたたび沈下がはじまったというごとく広域的に発生する事態をまねいているようである。都市開発の関連としては、土地の高度利用、高層化のなかで日照権についてはなんらの保証がされていないことは、今後の大きな問題となろう。気象変化には建物の巨大化、高層化による都市内の局地的な乱気流等の問題から、大きくは、たとえばシベリヤ開発にともなう河川流出位置の大幅な変更によって北極海の氷が解け、それが極東全般に大きく影響するとか、あるいは今後地球上のエネルギー消費量が増大すると空気中の炭酸ガス量が増して、結果として気温の上昇から北極の氷が解けて海の水位が上昇するなどといったことがいわれているが、これらのことは話として受け流すだけでなく、今後の方向、つまり開発の及ぼす広域、広範囲にわたる影響を予測しなければならないことを示唆しているとうけとるべきであろう。また、都市へ都市へと人口が集中するなかには、地方におれば正常な生活をおくれる人達が、都会のけん噪と圧迫に耐えられず潜在的な精神的欠陥を露呈したものと考えられる精神障害の多発も公害の一種といえよう。

以上のように自然界から人間の精神生活までに大きな阻害をもたらしている公害とは、近代化の名のもとに、環境の開発、改造を行なうといいながら、実は人間環境のみならず自然界そのものまでも破壊するにいたった生産の物産化のなせる業であり、したがって公害防止対策の基本理念は、本来の生産にたちかえること、すなわち、自然界のリズムのなかに人命のみならずあらゆる生命の代謝が展開されるよう人間環境の制御を行なうことにある。いいかえれば、自然を改造し、自然を征服しようとした近代機械文明から脱皮し、自然との共存・調和の人間文明を目指すことにある。ま

さに公害防止とは「自然回復」の歴史的大事業である。

このような考え方からすれば、都市問題の1つである各種都市施設の不足、欠落に対しても、単にたりないからつくるということであってはならないし、またそのつくり方そのものも災害、公害の視点からのチェックに十分耐えるものでなければならぬこと、これが人間と自然とが、破壊と滅亡を避けるための絶対にゆずれないギリギリの線であることも理解されよう。

### 3・新しい環境の創造と人間の回復

一方、いろいろな災害、公害をひきおこしている現状には、人間界のしくみが大きくかかわっている。このしくみ、つまり政治、経済、社会の体制は非常に複雑な構成、運動をしており、それらをどのようにとらえ、どのように対処していくべきかが問われているのであるが、いずれにせよ人びとはこのしくみのなかでしだいに生きがいを失ないつつあるように見える。それは一言でいえば体制のおしつけやおしきせのなかで個人の自由、可能性が限定されてきていることがおもな原因であろう。したがってそれからの脱却、つまり「人間回復」への転回もまた文化史上の大きな課題としてあたえられているのである。人間回復といっても、一体なにをどうするのかきわめてむずかしい問題であるが、基本的には物事の選択や決定あるいは創作や制御にみずから参加しているという実感がえられる行動様式を生みだすことであろう。直接民主主義的なものへの志向が強まると考えられるが、現在すでに姿をみせはじめている公害防止協定への市民代表の参加、訴訟運動、あるいは持株運動などはその萌芽となりうるか関心がよせられる。

したがって要約するならば、人間の生きる場をつくるということは、自然回復と人間回復とを2本

の旗印とし、災害<防災>と公害<環境保全>を基本的チェックポイントとしながら、創造的参加という行動様式を挺子として新しい環境づくりを行なうということであるといえよう。

なお、附言するならば、以上の論議の大前提として、人の安全にとっては戦争のないこと、平和が欠くことのできない条件である。戦争にからむ問題としては核と基地があげられるが、基地の存在が市民生活、都市活動にあたえるさまざまな影響については、横浜市および市民が身をもって経験したところであり、また現実にとりくまざるをえない問題である。核の問題は、軍事目的への使用はいうまでもなく人類存亡の重大事であるが、一方、原子力という人類第2の火のもつ影響力は、石油、ガスの比ではない。それは災害、公害、都市づくり等あらゆる面に関係し、しかも事故、汚染をおこしたあとで対策を考えるとといったままでの手ぬるいやり方ではとりかえしのつかない事態を生ずる危険を有しているので、とくに防災、汚染防止にはアポロ計画以上の万全を期すべきことはいくら強調してもしすぎることはない。

今後、人類がとりくまなければならない課題は以上のほかに人口問題がある。人の生命の誕生、すなわち人間界の基本的インプットにかかわる生殖の問題は、今後の世界的な規模での食糧、エネルギー問題の根底に横たわっている。そして心臓移植や試験管ベビーに表徴されるように、生殖あるいは生命それ自体がなんであるかがあらためて問い直されている。この問題は、生に対置する死の問題、それらをつつむ自然界、そして宇宙の神秘とともに、宗教や哲学への回帰をうながしていると思われる。

<企画調整室企画課長>